

手づくりハザードマップ作成手引き(参加者編) 2日目



手づくりハザードマップ作成の進め方(2日目)

2日目スタート

ワークショップ
(グループで・120分)

A手づくりハザードマップの記載内容の確認(40分)

1日目に手書きで作成した図面が、印刷物になっています。
1日目に書き込んだ内容が正しく記載されているか確認しましょう。
また他のグループを参考に、図面に書き込む内容を推敲します。

B地図にコメントの記入(40分)(ヒントは裏面に)

1日目に地図に書き込んだ思いや、過去の水害経験など、手づくりハザードマップを見る人に伝えたいコメントを記入します。

C作業結果の発表会(20分)

推敲された図面や、記入したコメントについて、グループごとに発表会を開催し、地域で情報共有します。

D手づくりハザードマップの活用方法の話し合い(20分)(ヒントは裏面に)

各戸に配布したり、地域の寄り合い所に貼り出したりと、手づくりハザードマップを地域で活用する方法について話し合います。

2日目終了

お疲れさまでした。手づくりハザードマップの完成です！

話し合った活用方法に合わせて地図を印刷し、いざといったときの行動に役立てましょう！

「A手づくりハザードマップの記載内容の確認」のポイント

手づくりハザードマップの目的を再確認しましょう

「洪水ハザードマップ」を思い出し、地域で想定される最大被害をイメージしてください。

しかしその状態では遅いです！手づくりハザードマップは、その状態になる前の「内水はん濫が始まり更に強い雨が降っている状態」を思い描きながら、お住まいの地域で早期の判断と行動を行う際のヒントとなる地図を作ることが目的です。

1日目に手書きした地図が、正しく表現されていますか？

印刷物に1日目に手書きした内容が正しく表現されているか確認します。その際、誤って表現されていることの訂正や、その内容を変えたいところの変更、また書き加えたいことを手書きで記入します。

避難所や一時避難所が記載されていますか？

早い段階で避難経路が遮断されることが予想される地区では、「一時避難所」の取り決めが安全確保に重要です。

一時避難所は、洪水ハザードマップで表示されている浸水深よりも高い建物があり、ある程度の広さと公共性を持つ建物や高台にしましょう。民間施設の場合は、町内会で事前に所有者などと話し合いをしておくが良いでしょう。

その他の確認事項

水の集まりやすい「くぼ地」

水が集まりやすく天井まで入る「くぼ地」では、堤防決壊前であっても、ゲリラ豪雨など内水で急激に水が集まった際に大変危険です。

避難の際の危険箇所

側溝や突起物など、避難の際に危険となる箇所の位置を確認しましょう。

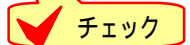
ただし、足元が見えない段階での外出は大変危険です。足元が危険になる前の早めの行動が重要です。

地図に掲載する写真

まち歩きの中で撮影した写真の中から、地図に掲載する写真を選びましょう。

その他

ポンプやひ門や緊急時駐車場など、地域独自の注意点があります。それが地図に掲載されているか確認しましょう。



完成した手づくりハザードマップの例(新城市豊島地区)



手づくりハザードマップは、行政が作成する地図とは違い、水害や地域の課題を学ぶ過程が重要です。この例にとらわれることなく、参加者の意見や住民に伝えたいことをまとめましょう。

「B地図にコメントの記入」にあたってのヒント

「1日目に図面に手書きで記載した思い」を記入しましょう。

なぜその場所を青く着色したのか。また、なぜその場所を一時避難所とし、その通りを避難経路としたのでしょうか。1日目に手書きで記載した理由の中で、地図を読む人に伝えたいことを記入しましょう。



「過去の豪雨体験から得た知恵や対処法」をまとめましょう

平成 12 年東海豪雨や平成 20 年 8 月末豪雨といった大きな水害、近年発生した豪雨・台風などの経験を地域の皆さんで話し合い、地図を読む人に伝えることは、非常に重要です。そのときの危険や感じたこと、予兆、取っておけばよかった行動などについて話し合い、まとめましょう。

過去の豪雨体験から得た知恵や対処法の例	<ul style="list-style-type: none"> ・ポンプ停止とともに浸水が始まった。ポンプ稼動条件やその確認方法を記載する。 ・地域で最も高いところは川の堤防の上。もしものときの一時避難所や避難路として記載する。
住民に伝えたい思いの例	<ul style="list-style-type: none"> ・いざというときにしっかり排水できるよう、日ごろから側溝や水路を清掃しよう。 ・地域のラジオの周波数を記載する。・インターネットで 橋の水位を確認しよう。

「D手づくりハザードマップの活用方法の話し合い」のヒント

手づくりハザードマップを作る過程で水害を学ぶことも大切ですが、地域で活用し、そうした水害の危険を語り伝えることも大切です。地域の皆さままで共有し、地域に根付くマップにしましょう。

- ・全戸に配布して、市町村の洪水ハザードマップと合わせて各家庭で掲示する。
- ・小学校、公民館や地区内の病院など、地域の皆さんが日ごろから集まる場所に掲載する。
- ・手づくりハザードマップをもとに、大雨行動訓練 を実施する。

“みずから守るプログラム”には、手づくりハザードマップを活用した“大雨行動訓練”のプログラムがあります。是非、定期的に訓練を実施して、日ごろから水害に備えてください。